



銀河鉄道の夜

宮沢賢治

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

一 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう^いに川だと言われたり、乳^{ちち}の流^{なが}れたあとだと言^いわれたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承^{しょうち}知ですか」先生は、黒板^{こくばん}につるした大きな黒い星座^{せいざ}の図の、上から下へ白くけぶった銀河^{ぎんが}帯^{たい}のようなところを指^さしながら、みんなに問^といをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五

人手をあげました。ジヨバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジヨバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちができるのでした。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジヨバンニさん。あなたはわかっているのでしょう」

ジヨバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立つ

てみるともうはつきりとそれを答えることができな
いのでした。ザネリが前の席せきからふりかえって、ジヨ
バンニを見てくすつとわらいました。ジヨバンニは
もうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先
生がまた言いいました。

「大きな望遠鏡ぼうえんきようで銀河ぎんがをよつく調しらべると銀河ぎんがはだ
いたい何でしよう」

やっぱり星だとジヨバンニは思いましたが、こん
どもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困こまったようすでしたが、眼めをカム

パネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外いがいなようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いそいで、

「では、よし」と言いいながら、自分で星図を指さしました。

「このぼんやりと白い銀河ぎんがを大きないい望遠鏡ぼうえんきようで見

ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんそうでしょう」

ジヨバンニはまっ赤かになつてうなずきました。けれどもいつかジヨバンニの眼めのなかには涙なみだがいつぱいになりました。そうだ僕ぼくは知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士はかせのうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌ざっしのなかにあつたのだ。それどころでなくカムパネルラは、その雑誌ざっしを読むと、すぐお父さんの書齋しよさいから巨おおきな本をもつてきて、ぎんが

というところをひろげ、まっ黒な頁ページいっぱい白に点々のある美しい写真しゃしんを二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事へんじをしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事しごとがつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊あそばず、カムパネルラともあんまり物を言いわないようになったので、カムパネルラがそれを知ってきのどくがつてわざと返事へんじをしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでし

た。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考
えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川
のその砂すなや砂利じやりの粒つぶにもあたるわけです。またこ
れを巨おおきな乳ちちの流ながれと考えるなら、もっと天の川と
よく似にています。つまりその星はみな、乳ちちのなか
まるで細こまかにうかんでいる脂油あぶらの球たまにもあたるので
す。そんなら何がその川の水にあたるかと言いいます
と、それは真空しんくうという光ひかりをある速はやさで伝つたえるもので、

太陽たいようや地球ちきゅうもやっぱりそのなかに浮うかんでいるので
す。つまりは私わたしどもも天の川の水のなかに棲すんでいる
るわけです。そしてその天の川の水のなかから四方
を見ると、ちようど水が深いほど青く見えるように、
天の川の底そこの深ふかく遠いところほど星がたくさん集
まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。
この模も型けいをごらんなさい」

先生は中にたくさん光る砂すなのつぶのはいった大き
な両面りょうめんの凸とつレンズを指さしました。

「天の川の形はちようどこんななのです。このいち

いちの光るつぶがみんな私わたしどもの太陽たいようと同じように
じぶんで光っている星だと考えます。私わたしどもの太陽たいよう
がこのほぼ中ごろにあつて地球ちきゅうがそのすぐ近くにあ
るとします。みなさんは夜にこのまん中に立ってこ
のレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつ
ちの方はレンズが薄うすいのでわずかの光る粒つぶすなわち
星しか見えないでしょう。こつちやこつちの方はガ
ラスが厚あついので、光る粒つぶすなわち星がたくさん見え
その遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつ
まり今日の銀河ぎんがの説せつなのです。そんならこのレンズ

の大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざ
まの星についてはもう時間ですから、この次の理科
の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭り
なので、みなさんは外へでてよくそらをごら
んなさい。ではここまでです。本やノートをおしま
いなさい」

そして教室じゅうはしばらく机の蓋をあけたりし
めたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたが、ま
もなくみんなはきちんと立って礼をすると教室を出
ました。

二
活版所かつばんじよ

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、
八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭こうてい
の隅すみの桜さくらの木きのところに集あつまっていました。それは
こんやの星祭ほしまつりに青いあかりをこしらえて川ながへ流ながす
烏瓜からすうりを取りとりに行く相談そうだんらしかったのです。

けれどもジヨバンニは手を大きく振ふってどしどし
学校の門もんを出て来きました。すると町の家々ではこん

やの銀河ぎんがの祭りまつにいちいの葉はの玉たまをつるしたり、ひのきの枝えだにあかりをつけたり、いろいろしたくをしていたのでした。

家へは帰らずジヨバンニが町を三つ曲まがってある大きな活版所かっばんじょにはいって靴くつをぬいで上がりますと、突つき当たりの大きな扉とびらをあけました。中にはまだ昼ひるなのに電燈でんとうがついて、たくさんはたからの輪転機りんてんきがばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシエードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働はたらいておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルにすわった人の所ところへ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚たなをさがしてから、

「これだけ拾ひろって行けるかね」と言いいながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジョバンニはその人の卓子テーブルの足もとから一つの小さな平ひらたい函はこをとりだして向むこうの電燈でんとうのたくさんついた、たてかけてある壁かべの隅すみの所ところへしゃがみ込こむと、小さなピンセットでまるで粟粒あわつぶぐらいの活字かつじを次つぎから次つぎへと拾ひろいはじめました。青い胸むねあてをした人がジョバンニのうしろを通

りながら、

「よう、虫めがね君、お早う」と言いますと、近くの四、五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷たくわらいました。

ジヨバンニは何べんも眼をぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうってしばらくたったころ、ジヨバンニは拾った活字をいっばいに入れた平たい箱をもういちど手にもった紙きれと引き合わせてから、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを

受け取うつてかすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをとすると扉しらふくをあけて計算台のところに来ました。すると白服しろふくを着きた人がやっばりだまって小さな銀貨ぎんかを一つジョバンニに渡わたしました。ジョバンニはにわかにに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをとすると、台の下に置おいた鞆かぼんをもつておもてへ飛とびだしました。それから元気よく口笛くちぶえを吹ふきながらパン屋やへ寄よつてパンの塊かたまりを一つと角砂糖かくざとうを一袋ふくろ買かいますといちもくさんに走りだしました。

三家

ジョバンニが勢いきおいよく帰って来たのは、ある裏町うらまちの小さな家でした。その三つならんだ入口のいちばん左側ひだりがわには空箱あきばこに紫むらさきいろのケールやアスパラガスが植うえてあつて小さな二つの窓まどには日覆ひおおいがおりたままになつていました。

「お母さん、いま帰ったよ。ぐあい悪わるくなかったの」
ジョバンニは靴くつをぬぎながら言いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事しごとがひどかったろう。

今日は涼きょうしくすずくてね。わたしはずうつとぐあいがいいよ」

ジヨバンニは玄関げんかんを上がって行きますとジヨバンニのお母さんがすぐ入口の室へやに白い巾きれをかぶって寝やすんでいたのです。ジヨバンニは窓まどをあけました。「お母さん、今日は角砂糖かくざとうを買ってきたよ。牛乳ぎゅうにゅうに入れてあげようと思って」

「ああ、お前まへさきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さん。姉ねえさんはいつ帰ったの」

「ああ、三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてく
れてね」

「お母さんの牛乳ぎゆうにゆうは来ていないんだらうか」

「来なかつたらうかねえ」

「ぼく行ってとつて来よう」

「ああ、あたしはゆっくりでいいんだからお前さき
におあがり、姉さんねえがね、トマトで何かこしらえて
そこへ置おいて行ったよ」

「ではぼくたべよう」

ジョバンニは「ジョバンニは」は底本では「ジョ

バンニは」窓まどのところからトマトの皿しらをとってパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰ってくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」

「だって今朝けさの新聞に今年は北りょうの方の漁りょうはたいへんよかったと書いてあったよ」

「ああだけどねえ、お父さんは漁りょうへ出ていないかもしれない」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へはいるようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持って行くよ」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪口わるくちを言うのい」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決けつして言いわない。カムパネルラはみんながそんなことを言いうときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちようどおまえたちのように小さいときからのお友とも達だちだったそうだよ」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途とち中ちゆうたびたびカムパネルラ

のうちに寄よった。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせるでんちゆうとまるくなつてそれに電柱や信号標もつしんごうひょういていて信号標しんごうひょうのあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになったせきゆ。いつかアルコールがなくなつたとき石油せきゆをつかつたら、缶かんがすっかりすすけたよ」

「そうかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゅうまだしいんとしているからな」

「早いからねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しっぽがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻はなを鳴らしてついてくるよ。ずうっと町の角かどまでついてくる。もっとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜からすうりのあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚こんばんは銀河ぎんがのお祭りまつだねえ」

「うん。ぼく牛乳ぎゆうにゆうをとりながら見てくるよ」

「ああ行っておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸きしから見ただけなんだ。一時間で行って

くるよ」

「もつと遊あそんでおいで。カムパネルラさんといっしょなら心配しんぱいはないから」

「ああきつといっしょだよ。お母さん、窓をしまえておこうか」

「ああ、どうか。もう涼すずしいからね」

ジョバンニは立たって窓まどをしめ、お皿さしやパンの袋ふくろをかたづけると勢いきおいよく靴くつをはいて、

「では一時間半はんで帰かえってくるよ」と言いいながら暗くらい戸口とぐちを出でました。

四 ケンタウル祭さいの夜

ジョバンニは、口笛くちぶえを吹ふいているようなさびしい口つきで、檜ひのきのまつ黒くろにならんだ町の坂さかをおりて来たのでした。

坂さかの下したに大きな一つの街燈がいとうが、青白あざわかしらく立派りっぱに光ひかりつて立たっていました。ジョバンニが、どんどんでんとう電燈でんとうの方ほうへおりて行いきますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引ひいていたジョバンニの影かげ

ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ったり、ジヨバンニの横の方へまわつて来るのでした。

(ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコンパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た)

とジヨバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりのとがったシャツを着て、電燈の向こう側

の暗いくら小路こうじから出て来て、ひらっとジヨバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜からすうりながしに行くの」ジヨバンニがまだそう言いってしまわないうちに、

「ジヨバンニ、お父さんから、ラッコの上着うわぎが来るよ」その子が投なげつけるようにうしろから叫さけびました。

ジヨバンニは、ぱっと胸むねがつめたくなり、そこからじゆうきいんと鳴るように思いました。

「なんだい、ザネリ」とジヨバンニは高く叫さけび返かえしました。もうザネリは向むここのひばの植うわった家

の中へはいつていました。

（ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのだろう。走るときはまるで鼠ねずみのようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのはザネリがばかなからだ）

ジョバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯あかりや木の枝えだで、すっかりきれいに飾かざられた街まちを通って行きました。時計屋とけいやの店には明るくネオン灯とうがついて、一秒びようごとに石でこさえたふくろの赤い眼めが、くるっくるっとうごいたり、い

ろいろな宝石ほうせきが海のような色をした厚い硝子あつの盤ばんに載のって、星のようにゆっくり循環めぐったり、また向むこう側がわから、銅どうの人馬がゆっくりこっちへまわって来たりするのでした。そのまん中にまるい黒い星座せいざ早見はやみが青いアスパラガスの葉はで飾かざってありました。

ジョバンニはわれを忘わすれて、その星座せいざの図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですが、その日と時間に合あわせて盤ばんをまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形だえんけいのな

かにめぐってあらわれるようになっており、やはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯になって、その下の方ではかすかに爆発して湯げでもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていましたし、いちばんうしろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっています。ほんとうにこんなような蠍だの勇士だのそらにぎっしりいるだろうか、ああぼくはその中をどこま

でも歩いてみたいと思つてたりしてしばらくぼんやり立っていました。

それからにわかにお母さんの牛乳ぎゆうにゆうのことを思いだしてジヨバンニはその店をはなれました。

そしてきゆうくつな上着うわぎの肩かたを気にしながら、それでもわざと胸むねを張はつて大きく手を振ふつて町を通つて行きました。

空気は澄すみきつて、まるで水のように通りや店の中なかを流ながれましたし、街燈がいとうはみなまっ青なもみや櫛ならの枝えだで包つつまれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木

などは、中にたくさんの豆電燈まめでんとうがついて、ほんとうにそこらは人魚の都みやこのように見えるのでした。子どもらは、みんな新しい折おりのついた着物きものを着きて、星めぐりの口笛くちぶえを吹ふいたり、「ケンタウルス、露つゆをふらせ」と叫さけんで走ったり、青いマグネシヤの花火もを燃もしたりして、たのしそうに遊あそんでいるのでした。けれどもジョバンニは、いつかまた深く首くびをたれて、そこらのにぎやかさとほまるでちがったことを考えながら、牛乳屋ぎゅうにゅうやの方いそへ急ぐのでした。

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮かんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門をはいり、牛のにおいのするうすくらい台所の前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで、

「今晚は」と言いましたら、家の中はしいんとして誰もいたようではありませんでした。

「今晚は、ごめんなさい」ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、年とった女の人が、どこかぐあいが悪いようにそろ

そろと出て来て、何か用かと口の中で言いました。

「あの、今日、牛乳ぎゆうにゆうが僕ぼく※「#小書き平仮名ん、183-7」とこへ来なかつたので、もらいにあがつたんです」ジヨバンニが一生けん命めいいきお勢いきおいよく言いいました。

「いま誰だれもいないでわかりません。あしたにしてください」その人は赤い眼めの下めのところをこすりながら、ジヨバンニを見おろして言いいました。

「おつかさんが病びようき気きなんですから今晩こんばんでないと困こまるんです」

「ではもう少ししたってから来てください」その人はもう行ってしまいそうでした。

「そうですか。ではありがとう」ジヨバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向こうの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六、七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨ

バンニの同級の子供らだったのです。ジョバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、いっそう勢いよくそっちへ歩いて行きました。

「川へ行くの」ジョバンニが言おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジョバンニ、ラッコの上着が来るよ」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジョバンニ、ラッコの上着が来るよ」すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎよう

としましたら、そのなかにカムパネルラがいたのです。カムパネルラはきのどくそうに、だまって少しわらって、おこらないだろうかというようにジョバンニの方を見ていました。

ジョバンニは、にげるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行ってまもなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲がるとき、ふりかえって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向こうにぼんや

り見える橋はしの方へ歩いて行ってしまったのでした。ジヨバンニは、なんとも言いえずさびしくなつて、いきなり走りだしました。すると耳に手をあてて、わあわあと言いいながら片足かたあしでびよんびよん跳とんでいた小さな子供こどもらは、ジヨバンニがおもしろくてかけるのだと思つて、わあいと叫さけびました。

まもなくジヨバンニは走りだして黒い丘おかの方へ急いそぎました。

五 天気輪てんきりんの柱はしら

牧場のうしろはゆるい丘になつて、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりふだんよりも低く、連なつて見えました。

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんだんのぼつて行きました。まっくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らしてされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出さ

れ、ジョバンニは、さつきみんなの持もって行つた
からすうり
鳥瓜からすうりのあかりのようだとも思いました。

そのまっ黒な、松まつや檜ならの林を越こえると、にわか
がらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から
北へ互わたっているのが見え、また頂いただきの、天気輪てんきりんの柱はしらも
見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの
花が、そこらいちめん、夢ゆめの中からでもかおりだ
したというように咲さき、鳥が一疋びき、丘おかの上を鳴き続つづ
けながら通つて行きました。

ジョバンニは、頂いただきの天気輪てんきりんの柱はしらの下に来て、どか

どかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞こえて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジヨバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷やされました。

野原から汽車の音が聞こえてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさん旅人が、苹果をむいたり、わらったり、いろいろなふうに行っていると考えますと、ジヨバンニは、

もうなんとも言えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

(この間原稿五枚分なし)

ところがいくら見ても、そのそらは、ひる先生の言つたような、がらんとした冷たいところだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のよう
に考えられてしかたなかつたのです。そしてジヨバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちらまたたき、脚が何べんも出たり引つ込んだり

して、とうとう蕈きのこのように長く延びるのを見ました。またすぐ眼めの下のまちまでが、やっぱりぼんやりしたたくさんの星の集まりあつか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

六 銀河ぎんがステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪てんきりんの柱はしらがいつかぼんやりした三角標さんかくひょうの形になって、しばらくほたる蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているの

を見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青のそらの野原にたちました。いま新しく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そらの野原に、まっすぐにすきつと立ったのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと言う声がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱつと明るくなって、まるで億万の蛍烏賊の火を一ぺんに化石させて、そらじゅうに沈めたというぐあい、またダイヤモンド会社で、ね

だんがやすくならないために、わざと穫れ^とないふりをして、かくしておいた金剛石^{こんごうせき}を、誰^{だれ}かがいきなりひっくりかえして、ばらまいたというふう^にに、眼^めの前がさあつと明るくなつて、ジョバンニは、思わず何べんも眼^めをこすつてしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、と、ジョバンニの乗^のっている小さな列車^{れっしや}が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道^{けいべんてつどう}の、小さな黄いろの電燈^{でんとう}のならんだ車室^{まど}に、窓^{まど}から外を見ながらすわっていたのです。車室の中

は、青い天鷲絨ピロードを張はった腰掛こしかけが、まるでがらあきで、向むここの鼠ねずみいろのワニスを塗ぬった壁かべには、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二つ光あっているのです。

すぐ前の席せきに、ぬれたようにまっ黒な上着うわぎを着た、せいの高い子供こどもが、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてそのこどもの肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓まどから顔を出そうとしたとき、にわかこどもにその子供が頭を引ひっ込こめ

て、こっちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。ジヨバンニが、カムパネルラ、きみは前からここにいたの、いとおうと思ったとき、カムパネルラが、

「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅おくれてしまっ
たよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追おいつ
かなかった」と言いいました。

ジヨバンニは、

（そうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出
かけたのだ）とおもいながら、

「どこかで待^まっていていようか」と言^いいました。するとカムパネルラは、

「ザネリはもう帰^かったよ。お父^{ちち}さんが迎^{むか}いにきたんだ」

カムパネルラは、なぜかそう言^いいながら、少し顔いろが青^{あざ}ざめて、どこか苦^{くる}しいというふうでした。するとジヨバンニも、なんだかどこかに、何か忘^{わす}れたものがあるというような、おかしな気^き持^もちがしてだま^だま^まってしまいました。

ところがカムパネルラは、窓^{まど}から外^{そと}をのぞきなが

ら、もうすっかり元気が直なおって、勢いきおいよく言いいました。

「ああしまった。ぼく、水筒すいとうを忘わすれてきた。スケッチ帳ちょうも忘わすれてきた。けれどかまわない。もうじき白鳥ていしやばの停車場ていしやばだから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛とんでいたって、ぼくはきつと見える」

そして、カムパネルラは、まるい板いたのようになった地図ちずを、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったく、その中に、白くあらわされた天の川の左

の岸きしに沿そって一条じようの鉄道線路てつどうせんろが、南へ南へとたどつて行くのでした。そしてその地図ちずの立派りっぱなことは、夜のようにまっ黒な盤ばんの上に、一々の停車場ていしやばや三角標さんかくひよう、泉水せんすいや森が、青や橙だいだいや緑みどりや、うつくしい光でちりばめられてありました。

ジョバンニはなんだかその地図ちずをどこかで見たと
うにおもいました。

「この地図ちずはどこで買ったの。黒曜石こくようせきでできてるね
え」

ジョバンニが言いいました。

「銀河ステーションで、もらったんだ。君もらわなかつたの」

「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたらうか。いまぼくたちのいるところ、ここだろう」

ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。

「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか」そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」ジヨバン
二は言いながら、まるでね上がりたいくらい愉快
になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、
高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延
びあがって、その天の川の水を、見きわめようとし
ましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりし
ませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、
そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきと
おって、ときどき眼のかげんか、ちらちら紫いろの
こまかな波をたてたり、虹のようにぎらつと光った

りしながら、声もなくどんどん流ながれて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐りんこう光の三角標さんかくひょうが、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙だいだいや黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、あるいは三角さんかくけい形、あるいは四辺しへんけい形、あるいは電いなずまや鎖くさりの形、さまざまに
ならんで、野原いっぱいいっぱいに光っているのです。ジョバンニは、まるでどきどきして、頭あたまをやけに振ふりました。するとほんとうに、そのきれいな野原のほらじゅうの青あおや橙だいだいや、いろいろかがやく三角標さんかくひょうも、てんでに

息をつくように、ちらちらゆれたり顫えたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た」ジヨバンニは言いました。

「それに、この汽車石炭せきたんをたいていないねえ」ジヨバンニが左手をつき出して窓まどから前の方を見ながら言いました。

「アルコールか電気だろう」カムパネルラが言いました。

するとちやうど、それに返事へんじするように、どこか

遠くの遠くのもやのもやの中から、セロのようなごうごうした声がきこえて来ました。

「ここの汽車は、ステイームや電気でうごいていない。ただうごくようにきまっているからうごいていないのだ。ごごと音をたてていると、そうおもえたちは思っているけれども、それはいままで音をたてる汽車にばかりなれているためなのだ」

「あの声、ぼくなんべんもどこかできいた」

「ぼくだって、林の中や川で、何べんも聞いた」

ごごとごごとごと、その小さなきれいな汽車は、

そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、
三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまで
もと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり
秋だねえ」カムパネルラが、窓の外を指さして言
いました。

線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石
でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの
花が咲いていました。

「ぼく飛びおりて、あいつをとって、また飛び乗っ

てみせようか」ジヨバンニは胸をおどらせて言いました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから」

カムパネルラが、そう言ってしまうかしまわらないうち、次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

と思つたら、もう次から次から、たくさんきいろのきれいな底そこをもったりんどうの花のコップが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむ

るように燃^もえるように、いよいよ光^もって立^たったので
す。

七 北十字^{きたじゆうじ}とプリオシン海岸^{かいがん}

「おっかさんは、ぼくをゆるしてくださるだろうか」
いきなり、カムパネルラが、思い切ったというよ
うに、少しどもりながら、せきこんで言^いいました。

ジョバンニは、

（ああ、そうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い一

つのちりのように見える橙だいたいいろの三角標さんかくひょうのあたりに
いらっしやって、いまぼくのことを考えているん
だった）と思いながら、ぼんやりしてだまっ
ていま

した。
「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、
どんなことでもする。けれども、いったいどんなこ
とが、おつかさんのいちばんの幸さいわいなんだろう」カム
パネルラは、なんだか、泣なきだしたいのを、一生け
ん命めいこらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃ

ないの」ジヨバンニはびっくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸いなんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるしてくださいさと思う」カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

にわかには、車のなかで、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を、水は声もなくかたちもなく流れ、その

流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らなただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて、それはもう、凍った北極の雲で鑄たといったらいいか、すきつとした金いろの円光をいただいで、しずかに永久に立っているのでした。

「ハレルヤ、ハレルヤ」前からもうしろからも声が起こりました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきものひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけた

り、どの人もつつましく指を組み合わせ、そつちに祈っているのです。思わず二人ともまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにつつくしくかがやいて見えませんでした。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向こう岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、

また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火きつねびのように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列れつでさえぎられ、白鳥の島しまは、二度どばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵えのようになつてしまい、またすすきがざわざわ鳴つて、とうとうすっかり見えなくなつてしまいました。ジョバンニのうしろには、いつから乗のっていたのか、せいの高い、黒いかつぎをした力

トリツクふうの尼あまさんが、まんまるな緑みどりの瞳ひとみを、じつとまっすぐに落おとして、まだ何かことばか声かが、そっちから伝つたわって来るのを、虔つつしんで聞いているというように見えました。旅人たびびとたちはしずかに席せきに戻もどり、二人ふたりも胸むねいっぱいのかなしみに似にた新しい気持きもちを、何気なくちがった語ことばで、そつと談はなし合あったのです。

「もうじき白鳥ていしやばの停車場だだねえ」

「ああ、十一時じゅういちかつきりには着つくんだよ」

早くも、シグナルみどりの緑みどりの燈あかりと、ぼんやり白はしろい柱はしらと

が、ちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、まもなくプラットホームの一系列の電燈が、うつくしく規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人はちょうど白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

さわやかな秋の時計の盤面には、青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十一時を指しました。みんなは、一ぺんにおりて、車室の中はがらんとなつ

てしまいました。

「二十分停車」と時計の下に書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか」ジヨバンニが言いま
した。

「降りよう」二人は一度にはねあがってドアを飛び出
して改札口へかけて行きました。ところが改札口に
は、明るい紫がかかった電燈が、一つ点いているばか
り、誰もいませんでした。そこらじゅうを見ても、
駅長や赤帽らしい人の、影もなかったのです。

二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える

銀杏いちじょうの木にかこ囲まれた、小さな広場に出ました。

そこから幅はばの広いみちが、まっすぐに銀河ぎんがの青光あおびかりの中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行つたか一人ひとりも見えませんでした。二人ふたりがその白い道を、肩かたをならべて行きますと、二人ふたりの影かげは、ちようど四方に窓まどのある室へやの中の、二本の柱はしらの影かげのように、また二つの車輪しゃりんの輻やのように幾本いくほんも幾本いくほんも四方へ出るのです。そしてまもなく、あの汽車から見えたきれいな河原かわらに来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂すなを一つまみ、掌てのひらにひろげ、指ゆびできしきしさせながら、夢ゆめのように言いっているのです。

「この砂すなはみんな水晶すいししようだ。中で小さな火が燃もえている」

「そうだ」どこでぼくは、そんなことを習ならったろうと思おもいながら、ジョバンニもぼんやり答こたえていました。

かわらかわらの礫こいしは、みんなすきとおつて、たしかに水晶すいししようや黄玉トパーズや、またくしゃくしゃの皺しゆうきよく曲まをあらわしたの

や、また稜かどから霧きりのような青白い光を出す鋼玉コランダムやら
でした。ジョバンニは、走ってその渚なぎさに行って、水
に手をひたしました。けれどもあやしいその銀河ぎんがの
水は、水素すいそよりももっとすきとおっていたのです。
それでもたしかに流ながれていたことは、二人ふたりの手首てくびの、
水にひたったところが、少し水銀すいぎんいろに浮ういたように
見え、その手首てくびにぶつつかっできた波なみは、うつく
しい燐光りんこうをあげて、ちらちらと燃もえるように見えた
のでもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっぱいにはえてい

る崖がけの下に、白い岩いわが、まるで運動場うんどうじょうのように平たいらに川そに沿って出ているのでした。そこに小さな五、六人の人かげが、何か掘ほり出すか埋うめるかしているらしく、立ったりかがんだり、時々なにかの道具どうぐが、ピカツと光ったりしました。

「行ってみよう」ふたり二人は、まるで一度どに叫さけんで、そっちの方へ走りました。その白い岩いわになったところの入口に、「プリオシン海岸かいがん」という、瀬戸物せともののつるつるした標札ひょうさつが立って、向こうの渚なぎさには、ところどころ、細ほそい鉄てつの欄干らんかんも植うえられ、木製もくせいのきれいなベンチ

も置いてありました。

「おや、変なものがあるよ」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきのがつつくるみの実のようなものをひろいました。

「くるみの実だよ。そら、たくさんある。流れて来たんじゃない。岩の中にはいつてるんだ」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない」

「早くあすこへ行行って見よう。きっと何か掘ってるから」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よって行きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近づいて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、つるはしをふりあげたり、スコップをつかったりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をし

ていました。

「そこのその突起とつきをこわさないように、スコップを
使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから
掘ほって。いけない、いけない、なぜそんな乱暴らんぼうをす
るんだ」

見ると、その白い柔やわらかな岩いわの中から、大きな大
きな青じろい獣けものの骨ほねが、横たおに倒れてつぶれたという
ふうになって、半分以上掘ほり出されてきました。そ
して気をつけて見ると、そこらには、蹄ひづめの二つある
足跡あしあとのついた岩いわが、四角しかくに十ばかり、きれいに切り

取られて番号ばんごうがつけられてありました。

「君たちは参観さんかんかね」その大学士だいがくしらしい人が、眼鏡めがねを
きらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみがたくさんあつたらう。それはまあ、ざつ
と百二十万年まんねんぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方
さ。ここは百二十万年前まんねんまえ、第三紀だいさんきのあとのころは
海岸かいがんでね、この下からは貝かいがらも出る。いま川の流
れているところに、そつくり塩水しおみずが寄せたり引いたり
もしていたのだ。このけものかね、これはボスといっ
てね、おいおい、そこ、つるはしはよしたまえ。て

いねいに鑿のみでやってくれたまえ。ボスと行ってね、
いまの牛うしの先祖せんぞで、昔むかしはたくさんいたのさ」

「ひょうほん標本にするんですか」

「いや、証明しょうめいするに要いるんだ。ぼくらからみると、こ
こは厚あつい立派りっぱな地層ちそうで、百二十万まんねん年ぐらい前にでき
たという証拠しょうこもいろいろあがるけれども、ぼくらと
ちがったやつからみてもやつぱりこんな地層ちそうに見え
るかどうか、あるいは風か水や、がらんとした空か
に見えやしないかということなのだ。わかったかい。
けれども、おいおい、そこもスコップではいけない。

そのすぐ下に肋骨ろっこつが埋うもれてるはずじゃないか」

大学士だいがくしはあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう」カムパネルラが地図と腕時計うでどけいとをくらべながら言いいました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼しつれいいたします」ジヨバンニは、ていねいに大学士だいがくしにおじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら」大学士だいがくしは、また忙いそがしそうに、あちこち歩きまわって監督かんとくをはじめました。

二人ふたりは、その白い岩いわの上を、一生けん命めい汽車におくれないように走りました。そしてほんとうに、風

のように走れたのです。息も切れず膝もあつくなり
ませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界じゅうだつて
かけれると、ジョバンニは思いました。

そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の
電燈がだんだん大きくなって、まもなく二人は、も
との車室の席にすわっていま行って来た方を、窓か
ら見ていました。

八 鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか」

がさがさした、けれども親切そうな、大人のおとなの聲が、
二人のふたりのうしろで聞こえました。

それは、茶いろの少しぼろぼろのがいとう外套を着て、白
いきれ巾でつつんだにもつ荷物を、二つに分けて肩かたに掛かけた、
赤髯あかひげのせなかのかがんだ人でした。

「ええ、いいんです」ジヨバンニは、少し肩かたをすぼ
めてあいさつしました。その人は、ひげの中でかす
かに微笑わらいながらにもつ荷物をゆっくり網棚あみだなにのせまし

た。ジヨバンニは、なにかたいへんさびしいような
かなしいような気がして、だまって正面しょうめんの時計とけいを見
ていましたら、ずうっと前の方で、硝子ガラスの笛ふえのよう
なものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごい
ていたのです。カムパネルラは、車室てんじょうの天井てんじょうを、あ
ちこち見ていました。その一つかげのあかりてんじょうに黒い甲虫かぶとむし
がとまって、その影かげが大きく天井てんじょうにうつついていたの
です。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわらい
ながら、ジヨバンニやカムパネルラのようにすを見て
いました。汽車はもうだんだん早くなつて、すすき

と川と、かわるがわる窓の外から光りました。

赤ひげの人が、少しおずおずしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへいらっしやるんですか」

「どこまでも行くんです」ジヨバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまでも行きますぜ」

「あなたはどこへ行くんです」カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジヨバン

二は思わずわらいました。すると、向むここの席せきにいた、とがった帽子ぼうしをかぶり、大きな鍵かぎを腰こしに下げた人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑わらいだしてしまいました。ところがその人は別べつにおこったでもなく、頬ほおをびくびくしながら返事へんじをしました。

「わっしはすぐそこで降おります。わっしは、鳥をつかまえる商売しょうばいでね」

「何鳥なにどりですか」

「鶴つるや雁がんです。さぎも白鳥しろとりもです」

「鶴つるはたくさんいますか」

「いますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか」

「いいえ」

「いまでも聞こえるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴きいてごらんなさい」

二人ふたりは眼めを挙あげ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧わくような音が聞こえて来るのでした。

「鶴つる、どうしてとるんですか」

「鶴つるですか、それとも鷺さぎですか」

「鷺さぎです」ジヨバンニは、どっちでもいいと思いな
がら答えました。

「そいつはな、雑作ぞうさない。さぎというものは、みんな
天の川の砂すなが凝かたまって、ぼおつとできるもんですから
ね、そして始終しじゆう川へ帰りますからね、川原で待まって
いて、鷺さぎがみんな、脚あしをこういうふうにしておりてく
るところを、そいつが地べたへつくかつかないうちに、
ぴたっと押おえちまうんです。するともう鷺さぎは、かた

まっつて安心あんしんして死しんじまいます。あとはもう、わかり切きってまさあ。押し葉おぼにするだけです」

「鷺さぎを押し葉おぼにするんですか。標本ひょうほんですか」

「標本ひょうほんじゃありません。みんなたべるじゃありませんか」

「おかしいねえ」カムパネルラが首くびをかしげました。「おかしいも不審ふしんもありませんや。そら」その男は立たって、網棚あみだなから包つつみをおろして、手てばやくくるくると解ときました。

「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです」

「ほんとうに鷺だねえ」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のように光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべったくなくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫りのようにならんでいたのです。

「眼をつぶってるね」カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白いつぶった眼にさわりました。頭の上の槍のような白い毛もちゃんとついていました。

「ね、そうでしょう」鳥捕りは風呂敷を重ねて、また

くるくると包つつんで紐ひもでくくりました。誰だれがいったい
ここらで鷺さぎなんぞたべるだろうとジヨバンニは思
ながら訊ききました。

「鷺さぎはおいしいんですか」

「ええ、毎日注文ちゆうもんがあります。しかし雁がんの方が、もつ
と売れます。雁がんの方がずっと柄がらがいいし、第一だいいち手数てすう
がありませんからな。そら」鳥捕とりとりは、また別べつの方
の包つつみを解ときました。すると黄と青じろとまだらに
なつて、なにかのあかりのようにひかる雁がんが、ちよ
うどさつきの鷺さぎのように、くちばしをそろえて、少

しひらべったくなくなって、ならんでいました。

「こっちはすぐたべられます。どうです、少しおあがりなさい」鳥捕りとりとは、黄いろの雁がんの足を、軽くかるひつぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらんなさい」鳥捕りとりとは、それを二つにちぎってわたしました。ジョバンニは、ちよつとたべてみて、

（なんだ、やっぱりこいつはお菓子かしだ。チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁がんが飛と

んでいるもんか。この男は、どこかそこらの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、たいへんきのどくだ」とおもいながら、やっぱりぼくぼくそれをたべていました。

「も少しおあがりなさい」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかったですけれども、

「ええ、ありがとう」といって遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向こうの席の、鍵をもった人に出し

ました。

「いや、商売しょうばいものをもらっちやすみませんな」その人は、帽子ぼうしをとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡わたり鳥どりの景気けいきは」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日おとといの第二限だいにげんころなんか、なぜ燈台とうだいの灯ひを、規則きそく以外いがいに間ま（二時空白）させるかって、あっちからもこっちからも、電話でんわで故障こしょうが来ましたが、なあに、こっちがやるんじやなくて、渡り鳥わたどりどもが、まっ黒にかたまって、あかし

の前を通るのですからしかたありませんや、わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのところへ持つて来たつてしかたがねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、こう言つてやりましたがね、はっは」

すすきがなくなつたために、向ここの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか」カムパネルラは、さつきから、訊こうと思つていたので。

「それはね、鷺をたべるには」鳥捕りは、こっちに向

き直なおりました。「天の川の水あかりに、十日もつるしておくかね、そうでなけあ、砂すなに二、四日うずめなけあいけないんだ。そうすると、水銀すいぎんがみんな蒸発じょうはつして、たべられるようになるよ」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子かしでしょう」やっぱりおなじことを考えていたとみえて、カムパネルラが、思い切ったというように、尋ねたずました。鳥捕とりとりは、何かたいへんあわてたふうで、

「そうそう、ここで降おりなけあ」と言いいながら、立たつて荷物にもつをとったと思うと、もう見えなくなっていま

した。

「どこへ行ったんだろう」二人は顔を見合わせました
ら、燈台守は、にやにや笑って、少し伸びあがるよ
うにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。
二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りが、
黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめ
んのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔を
して両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。
「あすこへ行ってる。ずいぶん奇体だねえ。きつと
また鳥をつかまえるところだねえ。汽車が走って行か

ないうちに、早く鳥がおりといいな」と言つたとたん、がらんとした桔梗ききよういろの空から、さつき見たような鷺さぎが、まるで雪の降ふるのように、ぎやあぎやあ叫さけびながら、いっばいに舞まいおりて来ました。するとあの鳥捕とりとりは、すっかり注文ちゆうもん通りだというようにほくほくして、両足りようあしをかつきり六十度どに開いて立つて、鷺さぎのちぢめて降りて来る黒い脚あしを両手りようてで片かたつばしから押おえて、布ぬのの袋ふくろの中に入れるのでした。すると鷺さぎは、蛍ほたるのように、袋ふくろの中でしばらく、青くぺかぺか光きったり消えたりしていましたが、おしまいとう

とう、みんなぼんやり白くなって、眼めをつぶるのでした。ところが、つかまえられない鳥よりは、つかまえられる鳥より無事ぶじに天の川の砂すなの上に降りおるものの方が多おおかったです。それは見ていると、足が砂すなへつくや否いなや、まるで雪ゆきの解とけるように、縮ちぢまってひらべったくなくなって、まもなく溶鉱炉ようこうろから出た銅どうの汁しるのように、砂すなや砂利じやりの上にひろがり、しばらくは鳥の形が、砂すなについているのでしたが、それも二、三度ど明るくなったり暗くらくなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまおうのでし

た。

鳥捕りは、二十疋ばかり、袋に入れてしまおうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、かえつて、

「ああせいせいした。どうもからだにちようど合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな」というききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうそこでとつて来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直している

のでした。

「どうして、あすこから、いつぺんにここへ来たんですか」ジヨバンニが、なんだかあたりまえのよう
な、あたりまえでないような、おかしな気がして問
いました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜ
んたいあなた方は、どちらからおいでですか」

ジヨバンニは、すぐ返事へんじをしようと思いましたが
れども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうど
うしても考えつきませんでした。カムパネルラも、

顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのでした。

「ああ、遠くからですね」鳥捕りは、わかったというように雑作ぞうさなくうなずきました。

九 ジョバンニの切符きっぷ

「もうここらは白鳥区くのおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所かんそくじょです」
窓まどの外の、まるで花火でいっぱいのような、あま

の川のまん中に、黒い大きな建物たてものが四棟むねばかり立っ
て、その一つの平屋根ひらやねの上に、眼めもさめるような、
青宝玉サファイアと黄玉トパーズの大きな二つのすきとおった球たまが、輪わ
になってしずかにくるくるとまわっていました。黄
いろのがだんだん向むこうへまわって行って、青い小
さいのがこっちへ進すすんで来、まもなく二つののはじは、
重かさなり合あって、きれいな緑みどりいろの両面凸りょうめんとうつレンズのか
たちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ
だして、とうとう青いのは、すっかりトパーズの
正面しょうめんに来きましたので、緑みどりの中心しんと黄いろな明ある環わ

とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆にくり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向こうへめぐり、黄いろのはこつちへ進み、またちようどさつきのようなふうになりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、眠っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……」
鳥捕りが言いかけたとき、

「切符を拝見いたします」三人の席の横に、赤い

帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて言いました。鳥捕りは、だまっpegかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジヨバンニたちの方へ出しました。

「さあ」ジヨバンニは困って、もじもじしていました。たら、カムパネルラはわけもないというふうで、小さな鼠いろの切符を出しました。ジヨバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにで

も、はいつていたかとおもいながら、手を入れてみましたら、何か大きなたたんだ紙きれにあたりました。こんなものはいつていたろうかと思って、急いで出してみましたら、それは四つに折ったはがきぐらいの大きさ（「大き」はママ）の緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですからなんでもかまわない、やっちまえと思って渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直ってていねいにそれを開いて見えました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたがしきりしきりとうたいかんしゆ

を熱心ねっしんにのぞいていましたから、ジヨバンニはたしかにあれは証明書しやうめいしよか何かだったと考かんえて少し胸むねが熱あつくなるような気がしました。

「これは二次空間じくうかんの方かたからお持ちもちになつたのですか」
車掌しやしやうがたずねました。

「なんだかわかりません」もう大丈夫だいじやうぢふだと安心あんしんしながらジヨバンニはそつちを見あげてくつくつ笑わらいました。

「よろしゅうございます。南十字サウザンクロスへ着つきますのは、次の第三時だいころになります」車掌しやしやうは紙しをジヨバンニに

渡して向こうへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だったか待ちかねたというように急いでのできこみました。ジョバンニも全く早く見たかったです。ところがそれはいちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもので、だまって見ているとなんだかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらっとそれを見てあわてたように言いました。

「おや、こいつはたいしたもんですぜ。こいつはもう、

ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじやない、どこでもかつてにあるける通行券です。こいつをお持ちになれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行けるはずでさあ、あなた方たいしたもんですね」

「なんだかわかりません」ジヨバンニが赤くなつて答えながら、それをまたたたんでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていました。その鳥捕りの時々たいしたもんだというように、ちらちらこつち

を見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき鷺わしの停車場ていしやじやうだよ」カムパネルラが向むこう岸ぎしの、三つならんだ小さな青じろい三角標さんかくひやうと、地図とを見くらべて言いいました。

ジョバンニはなんだかわけもわからずに、にわかにとなりの鳥捕とりとりがきのどくでたまらなくなりました。鷺わしをつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包つつんだり、ひとの切符きっぷをびっくりしたように横目よこめで見えてあわててほめだしたり、そんなことを一々考えていると、もうその見ず

知らずの鳥捕りのために、ジヨバンニの持つて
ものでも食べるものでもなんでもやってしまいた
い、もうこの人のほんとうの幸になるなら、自分が
あの光る天の川の河原に立って百年つづけて立って
鳥をとってやってもいいというような気がして、ど
うしてももう黙だまっていられなくなりました。ほんと
うにあなたのほしいものはいったい何ですかと訊きこ
うとして、それではあんまり出し抜けだから、どう
しようかと考えてふり返かえって見ましたら、そこには
もうあの鳥捕りがいませんでした。網棚あみだなの上には白

い荷物にもつも見えなかったのです。また窓まどの外で足をふんばってそらを見上げて鷺さぎを捕とるしたくをしているのかと思って、急いそいでそつちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子すなごと白いすすきの波なみばかり、あの鳥捕とりとりの広いせなかもとがった帽子ぼうしも見えませんでした。

「あの人どこへ行つたろう」カムパネルラもぼんやりそう言いっていました。

「どこへ行つたろう。いったいどこでまたあうのだろう。僕ぼくはどうしても少しあの人に物ものを言いわなかつ

たろう」

「ああ、僕もそう思っているよ」

「僕はその人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕はたいへんつらい」ジヨバンニはこんなへんてこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで言ったこともないと思いました。

「なんだか苹果のにおいがする。僕いま苹果のことを考えたためだろうか」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果のにおいだよ。それから野茨のにおい

「おいもする」

ジヨバンニもそこらを見ましたがやつぱりそれは窓まどからでもはいって来るらしいのでした。いま秋だから野茨のいばらの花のにおいのするはずはないとジヨバンニは思いました。

そしたらにわかなにそこに、つやつやした黒い髪かみの六つばかりの男の子が赤いジャケットのぼたんもかけず、ひどくびっくりしたような顔をして、がたがたふるえてはだしで立っていました。隣となりには黒い洋服ようふくをきちんと着きたせいせいの高い青年がいつぱいに風

に吹^ふかれていたけやきの木のような姿勢^{しせい}で、男の子の手をしつかりひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ」青年のうしろに、もひとり、十二ばかりの眼^めの茶いろな可愛^{かわい}らしい女の子が、黒い外套^{がいとう}を着^きて青年の腕^{うで}にすがって不思議^{ふしぎ}そうに窓^{まど}の外を見ているのでした。

「ああ、ここはランカシヤだ。いや、コンネクテカット州^{しゅう}だ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわ

いことありません。わたくしたちは神さまに召され
ているのです」黒服の青年はよろこびにかがやいて
その女の子に言いました。けれどもなぜかまた額に
深く皺を刻んで、それにたいへんつかれているらし
く、無理に笑いながら男の子をジョバンニのとなり
にすわらせました。それから女の子にやさしくカム
パネルラのとりの席を指さしました。女の子はす
なおにそこへすわって、きちんと両手を組み合わせ
ました。

「ぼく、おおねえさんのところへ行くんだよう」腰掛け

たばかりの男の子は顔を変へんにして燈台看守とうだいかんしゅの向むこうの席せきにすわったばかりの青年に言いいました。青年はなんとも言いえず悲かなしそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれたぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手りょうてを顔にあててしくしく泣ないてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事しごとがあるのです。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おっかさんはどんなに永ながく待まっていていらつしやったでしょう。わたしの大事だいじな

タダシはいまどんな歌をうたっているだろう、雪ゆきの降ふる朝にみんなと手をつないで、ぐるぐるにわこのやぶをまわってあそんでいるだろうかと考えたり、ほんとうに待まって心配しんぱいしていらっしやるんですから、早く行って、おつかさんにお目にかかりましようね」

「うん、だけど僕ぼく、船ふねに乗のらなけあよかったなあ」
「ええ、けれど、ごらんなさい、そら、どうです、あの立派りっぱな川、ね、あすこはあの夏じゅう、ツインクル、ツインクル、リトル、スターをうたってやす

むとき、いつも窓まどからぼんやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしょう、あんなに光っています」

泣ないていた姉あねもハンケチで眼めをふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟きょうだいにまた言いいました。

「わたしたちはもう、なんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅たびして、じき神かみさまのそこへ行きます。そこならもう、ほんとうに明るくておいがよくて立派りっぱな人たちでいっぱい

です。そしてわたしたちの代わりかにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、心配しんぱいして待つまているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元気を出しておもしろくうたって行きましょう」青年は男の子のぬれたような黒い髪かみをなで、みんなを慰めなぐさながら、自分もだんだん顔いろがかがやいてきました。「あなた方はどちらからいらっしやったのですか。どうなすったのですか」

さっきの燈台看守とうだいかんしゆがやっと少しわかったように青

年にたらずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷山ひょうざんにぶつつかって船が沈しずみましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急きゆうな用ようで二か月前、一足さきに本国へお帰りになったので、あとから発たつたのです。私は大学へはいつていて、家庭教師かていきょうしにやとわれていたのです。ところがちょうど十二日目、今日か昨日きのうのあたりです、船が氷山ひょうざんにぶつつかって一ぺんに傾かたむきもう沈しずみかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧きりが非常ひじょうに深ふかかったのです。ところがボートは左舷さげんの方はんぶん半分はもうだめに

なっていましたから、とてもみんなは乗り切らない
のです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は
必死ひっしとなつて、どうか小さな人たちを乗せてくださ
いと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いて、
そして子供たちのために祈いのつてくれました。けれど
もそこからボートまでのところには、まだまだ小さ
な子どもたちや親たちやなんかいて、とても押しおしの
ける勇氣ゆうきがなかったのです。それでもわたくしはど
うしてもこの方たちをお助けたすするのが私の義務ぎむだと
思いましたから前にいる子供らを押おしのけようとし

ました。けれどもまた、そんなにして助け^{たす}てあげるよりはこのまま神^{かみ}の御前^{みまえ}にみんなで行く方が、ほんとうにこの方たちの幸福^{こうふく}だとも思いました。それからまた、その神^{かみ}にそむく罪^{つみ}はわたくしひとりです。しよってぜひとも助け^{たす}てあげようと思しました。けれども、どうしても見ているとそれができないのでした。子どもらばかりのボートの中へはなしてやって、お母さんが狂気^{きょうき}のようにキスを送^{おく}りお父さんがかなしいのをじつとこらえてまっすぐに立っているなど、とてももう腸^{はらわた}もちぎれるようでした。そのう

ち船はもうずんずん沈しずみますから、私たちはかたまって、もうすっかり覚悟かくごして、この人たち二人を抱だいて、浮かべるだけは浮かぼうと船の沈しずむのを待まっていました。誰だれが投げたかライフブイが一つ飛とんで来ましたけれどもすべってずうつと向むこうへ行いってしまいました。私は一生けん命めいで甲板かんぱんの格子こうしになつたところをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく三〇六番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのときにわかにかに大きな

音がして私たちは水に落ち、もう渦にはいったと思
いながらしつかりこの人たちをだいて、それからぼ
うつとしたと思っただらもうここへ来ていたのです。
この方たちのお母さんは一昨年没さくねんななりました。
ええ、ボートはきつと助たすかったにちがいありません、
なにせよほど熟練じゆくれんな水夫すいふたちが漕こいで、すばやく船
からはなれていましたから」

そこから小さな嘆息たんそくやいのりの声が聞こえジョ
バンニもカムパネルラもいままで忘わすれていたいろい
ろのことをぼんやり思い出して眼めが熱あつくなりまし

た。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったろうか。その氷山ひょうざんの流ながれる北のはての海で、小さな船ふねに乗のって、風や凍こおりつく潮水しおみずや、はげしい寒さむさとたたかって、たれかが一生けんめいはたらいしている。ぼくはそのひとにほんとうにきのどくです。してすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだらう）

ジョバンニは首くびをたれて、すっかりふさぎ込こんでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中のできごとなら、峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福こうふくに近づく一あしずつですから」

燈台守とうだいもりがなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいいたに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」

青年が祈いのるようにそう答えました。

そしてあの姉弟きょうだいはもうつかれてめいめいぐったり席せきによりかかって睡ねむっていました。さっきのあのは

だしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向こうの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまざまの三角標、その大きなものの上には赤い点々をうつた測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集まってぼおつと青白い霧のよう、そこからか、またはもつと向こうからか、ときどきさまざまの形のぼんやりした狼煙のようなもの

が、かわるがわるきれいな桔梗ききよういろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗きれいな風は、ばらのおいでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果りんごはおはじめてでしょう」向むここの席せきの燈台看守とうだいかんしゆがいつか黄金きんと紅べにでうつくしくいろどられた大きな苹果りんごを落おとさないように両手りょうてで膝ひざの上にかかえていました。

「おや、どっから来たのですか。立派りっぱですねえ。こちらではこんな苹果りんごができるのですか」青年せいねんはほんとうにびっくりしたらしく、燈台看守とうだいかんしゆの両手りょうてにかか

えられた一もりの苹果りんごを、眼めを細ほそくしたり首くびをまげたりしながら、われを忘わすれてながめていました。

「いや、まあおとりください。どうか、まあおとりください」

青年は一つとつてジヨバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向むここの坊ぼっちゃんがた。いかがですか。おとりください」

ジヨバンニは坊ぼっちゃんといわれたので、すこしやくにさわってだまっていますでしたが、カムパネル

ラは、

「ありがとうございます」と言いました。

すると青年は自分でとって一つずつ二人に送^{おく}つてよこしましたので、ジョバンニも立って、ありがとうございますと言^いいました。

燈台看守^{とうだいかんしゅ}はやつと両腕^{りょううで}があいたので、こんどは自分で一つずつ睡^{ねむ}っている姉弟^{きょうだい}の膝^{ひざ}にそっと置^おきました。

「どうもありがとうございます。どこでできるのですか。こんな立派^{りっぱ}な苹果^{りんご}は」

青年はつくづく見ながら言いました。

「この辺あたりではもちろん農業のうぎやうはいただきますけれどもたいていひとりでもいいものができるとな約束やくそくになつております。農業のうぎやうだつてそんなにほねはおれはしません。たいてい自分の望のぞむ種子たねさえ播まけばひとりへんりでにどんどんできます。米だつてパシフィック辺へんのように殻からもないし十倍ばいも大きくてにおいもいいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業のうぎやうはもうありません。苹果りんごだつてお菓子かしだつて、かすが少しもありませんから、みんなそのひとその

ひとによってちがった、わずかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまふのです」

にわかにかに男の子がばっちり眼をあいて言いました。

「ああぼくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんがね、立派な戸棚や本のあるところにいてね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこわらつたよ。ぼく、おつかさん。りんごをひろってきてあげましようか、と言ったら眼がさめちやつた。ああここ、さつきの汽車のなかだねえ」

「その苹果りんごがそこにあります。このおじさんにいた
だいたのですよ」青年が言いいました。

「ありがとうございます。おや、かおるねえさんまだ
ねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごら
ん、りんごをもらったよ。おきてごらん」

姉あねはわらって眼めをさまし、まぶしそうに両手りょうてを眼め
にあてて、それから苹果りんごを見ました。

男の子はまるでパイをたべるように、もうそれを
たべていました。またせつかくむいたそのきれいな
皮かわも、くるくるコルク抜ぬきのような形かたちになって床ゆかへ

落ちるまでの間にはすうっと、灰いろに光って蒸発してしまおうのでした。

二人はりんごをたいせつにポケットにしまいました。

川下の向こう岸に青く茂った大きな林が見え、その枝には熟してまっ赤に光るまるい実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじってなるとも言えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつととしてからだをふるうようにしました。

だまってその譜ふを聞いていると、そこらにいちめん黄いろや、うすい緑みどりの明るい野原のはらか敷物しきものかがひろがり、またまっ白な蠟ろうのような露つゆが太陽たいようの面めんをかすめて行くように思われました。

「まあ、あの鳥からす」カムパネルラのとなりの、かおると呼よばれた女の子が叫さけびました。

「からすでない。みんなかささぎだ」カムパネルラがまた何気なくしかるように叫さけびましたので、ジヨ

バンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうに
しました。まったく河原の青じろいあかりの上に、
黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいに列になつてと
まつてじつと川の微光を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴん
と延びてますから」青年はとりなすように言いまし
た。

向こうの青い森の中の三角標はすっかり汽車の
正面に來ました。そのとき汽車のずうつとうしろの
方から、あの聞きなれた三〇六番の讚美歌のふしが

聞こえてきました。よほどの人数で合唱がっしょうしているらしいのでした。青年はさつと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまたすわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。

ジョバンニまでなんだか鼻はなが変へんになりました。けれどもいつともなく誰だれともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジョバンニもカムパネルラもいっしょにうたいだしたのです。

そして青い橄欖かんらんの森が、見えない天の川の向むこうにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまい、そこから流ながれて来るあやしい楽が器つきの音も、もう汽車のひびきや風の音にすりへらされてずうつとかすかになりました。

「あ、孔雀くじやくがいるよ。あ、孔雀くじやくがいるよ」

「あの森ライラヤドの宿やどでしょう。あたしきつとあの森の中にむかしの大きなオーケストラの人たちあつが集あつまっていらつしやると思うわ、まわりには青い孔雀くじやくやなんかたくさんいると思うわ」

「ええ、たくさんいたわ」女の子がこたえました。

ジョバンニはその小さく小さくなっているまはもう一つの緑いろの貝みどりぼたんかいのように見える森の上にさっさと青じろく時々光ってその孔雀くじやくがはねをひろげたりとじたりする光の反射はんしやを見ました。

「そうだ、孔雀くじやくの声だつてさつき聞こえた」カムパネルラが女の子に言いいました。

「ええ、三十疋てびきぐらいはたしかにいたわ」女の子が答えました。

ジョバンニはにわかになんとも言いえずかなしい気

がして思わず、

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊あそんで行いこうよ」とこわい顔をして言いおうとしたくらいでした。

ところがそのときジョバンニは川下の遠くの方に不思議ふしぎなものを見ました。それはたしかになにか黒いつるつるした細ほそなが長いもので、あの見えない天の川の水の上に飛とび出してちよつと弓ゆみのようなかたちに進すすんで、また水の中にかくれたようでした。おかしいと思ってまたよく気をつけていましたら、こんどはずっと近くでまたそんなことがあったらしいので

した。そのうちもうあっちでもこっちでも、その黒いつるつるした変なものが水から飛び出して、まるで飛んでまた頭から水へくぐるのがたくさん見えてきました。みんな魚のように川上へのぼるらしいのでした。

「まあ、なんででしょう。たあちゃん。ごらんなさい。

まあたくさんだわね。なんででしょうあれ」

睡そうに眼をこすっていた男の子はびっくりしたように立ちあがりました。

「なんだろう」 青年も立ちあがりました。

「まあ、おかしな魚だわ、なんでしようあれ」

「海豚いるかです」カムパネルラがそつちを見ながら答えました。

「海豚いるかだなんてあたしはじめてだわ。けどここ海じやないんでしよう」

「いるかは海にいるときまっついていない」あの不思議ふしぎな低い声ひくがまたどこからかしました。

ほんとうにそのいるかのかたちのおかしいことは、二つのひれをちようど両手りょうてをさげて不動ふどうの姿勢しせいをとったようなふうにして水の中から飛び出して来

て、うやうやしく頭を下にして不動の姿勢のまま
た水の中へくぐって行くのでした。見えない天の川
の水もそのときはゆらゆらと青い焰ほのおのように波なみをあ
げるのでした。

「いるかお魚でしうか」女の子がカムパネルラに
はなしかけました。男の子はぐったりつかれたよう
に席せきにもたれて睡ねむっていました。

「いるか、魚じゃありません。くじらと同じような
けだものです」カムパネルラが答えました。

「あなたくじら見たことあって」

「僕ぼくあります。くじら、頭と黒いしっぽだけ見えます。潮しおを吹ふくとちようど本にあるようになります」

「くじらなら大きいわねえ」

「くじら大きいです。子供こどもだっているかぐらいあります」

「そうよ、あたしアラビアンナイトで見たわ」姉あねは細ほそい銀ぎんいろの指輪ゆびわをいじりながらおもしろそうにはなししていました。

(カムパネルラ、僕ぼくもう行っちまうぞ。僕ぼくなんか鯨くじらだって見たことないや)

ジョバンニはまるでたまらないほどいらしな
がら、それでも堅く、唇を嚙んでこらえて窓の外を
見ていました。その窓の外には海豚のかたちももう
見えなくなつて川は二つにわかれましました。そのまっ
くらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組みま
れ、その上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶつ
た男が立っていました。そして両手に赤と青の旗を
もつてそらを見上げて信号しているのです。

ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗
をふっていました。が、にわかには赤旗をおろしてうし

ろにかくすようにし、青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のようにはげしく振りました。すると空中にざあつと雨のような音がして、何かまっくらなもの、いくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸のように川の向こうの方へ飛んで行くのでした。ジヨバンニは思わず窓からからだを半分出して、そつちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を、実に何万という小さな鳥どもが、幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通って行くのでした。

「鳥が飛んで行くな」ジヨバンニが窓の外で言いました。

「どら」カムパネルラもそらを見ました。

そのときあのやぐらの上のゆるい服の男はにわか
に赤い旗をあげて狂気のようにふりうごかしまし
た。するとぴたつと鳥の群れは通らなくなり、それ
と同時にびしゃあんというつぶれたような音が川下
の方で起こって、それからしばらくしいんとしまし
た。と思ったらあの赤帽の信号手がまた青い旗を
ふって叫んでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥」その声もはつきり聞こえました。

それといっしょにまた幾万いくまんという鳥の群れむがそらをまっすぐにかけたのです。二人ふたりの顔を出しているまん中の窓まどからあの子が顔を出して美しい頬ほおをかがやかせながらそらを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそらのきれいなこと」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気なまいきな、いやだいたいと思しながら、だまって口をむすんでそらを見あげ

ていました。女の子は小さくほっと息いきをして、だまつて席せきへ戻もどりました。カムパネルラがきのどくそうに窓まどから顔を引ひつ込こめて地図を見みていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしょいか」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号しんごうしてるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう」

カムパネルラが少しおぼつかないそうに答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引ひつ込こめたかったですけれども明る

いとこへ顔を出すのがつらかったので、だまってこらえてそのまま立って口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなになしいのだろう。僕はもつとところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向こうにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにせずかでつめたい。僕はあれをよく見てところもちをしずめるんだ）

ジョバンニは熱って痛いあたまを両手で押えるようにして、そっちの方を見ました。

（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕ぼくといっしよに行くひとはないだろうか。カムパネルラだつてあんな女の子とおもしろそうに談はなしているし僕はほんとうにつらいなあ）

ジョバンニの眼めはまた泪なみだでいっぱいになり、天の川もまるで遠くへ行いつたようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖がけの上を通るようになりましむた。向むかこう岸ぎしもまた黒いいろの崖がけが川の岸きしを下流かりゆうに下るにしたがつて、だんだん高

くなつていくのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増してきて、もういまは列のように崖と線路との間にならび、思わずジョバンニが窓から顔を引っ込めて向こう側の窓を見ましたときは、美しいそらの野原の地平線のはてまで、その大きなとうもろこしの木がほとんどいちめん植えられて、さやさや風にゆらぎ、その立派なちぢれた葉

のさきからは、まるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいっぱいについて、赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが、

「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに言いましたけれども、ジョバンニはどうしても気持ちがおりませんでしたから、ただぶっきらぼうに野原を見たまま、

「そうだろう」と答えました。

そのとき汽車はだんだんしずかになって、いくつ

かのシグナルとてんてつ器きの灯あかりを過ぎ、小さな
停車場ていしやばにとまりました。

その正面しょうめんの青じろい時計とけいはかつきり第二だいにじ時を示しめ
し、風もなくなり汽車もうごかず、しずかなしずか
な野原のなかにその振り子ふりこはカチツカチツと正しく
時を刻きざんでいくのでした。

そしてまったくその振り子ふりこの音のたえまを遠くの
遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律せんりつが糸
のように流ながれて来るのでした。

「新世界交響楽しんせかいこうきやうがくだわ」向むここの席せきの姉あねがひとりごとの

ようにこつちを見ながらそつと言いました。

全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰も
みんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしずかないところで僕はどうしてもっと
愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさ
びしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあん
まりひどい、僕といっしょに汽車に乗っているながら、
まるであんな女の子とばかり談しているんだもの。
僕はほんとうにつらい）

ジョバンニはまた手で顔を半分かくすようにして

向むここの窓まどのそとを見つめていました。

すきとおった硝子ガラスのような笛ふえが鳴って汽車はしずかに動きだし、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛くちやふえを吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺へんはひどい高原ですから」

うしろの方で誰だれかとしよりらしい人の、いま眼めがさめたというふうではきはき談はなしている声がしました。

「とうもろこしだつて棒ぼうで二尺も孔あなをあけておいてそこへ播まかないとはえないんです」

「そうですか。川までにはよほどありましたしょうかねえ」
「ええ、ええ、河までは二千尺から六千尺あります。
もうまるでひどい峡谷になっているんです」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったろうか、ジョバンニは思わずそう思いました。

あの姉は弟を自分の胸によりかからせて睡らせながら黒い瞳をうつとりと遠くへ投げて何を見るでもなしに考え込んでいるのでしたし、カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、男の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをしてジョバンニ

の見る方を見ているのでした。

突然とつぜんとうもろこしがなくなつて巨おおきな黒い野原のほらが
いっばいにひられました。

新世界交響樂しんせかいこうきょうがくはいよいよはつきり地平線ちへいせんのはてか
ら湧わき、そのまっ黒な野原のほらのなかを一人のインデア
ンが白い鳥の羽根はねを頭につけ、たくさんの石を腕うでと
胸むねにかざり、小さな弓ゆみに矢やをつがえていちもくさん
に汽車を追おつて来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。お
ねえさまごらんなさい」

黒服くろふくの青年も眼めをさましました。

ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走おって来るわ、あ、あ、走おって来るわ。追おいかけて
いるんでしよう」

「いいえ、汽車を追おってるんじゃないんですよ。獵りよう
をするか踊おどるかしてるんですよ」

青年はいまどこにいるか忘わすれたというふうには
ケツトに手を入れて立ちながら言いいました。

まったくインデアンは半はん分ぶんは踊おどっているよう
でした。第一だいいちかけるにしても足のふみようがもつと経けい済さい

もとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり
白いその羽根はねは前の方へ倒れるたおようになり、インデ
アンはぴたつと立ちどまって、すばやく弓ゆみを空にひ
きました。そこから一羽わの鶴つるがふらふらと落おちて来
て、また走り出したインデアンの大きくひろげた
両手りょうてに落おちこみました。インデアンはうれしそうに
立たってわらいました。そしてその鶴つるをもつてこっち
を見ている影かげも、もうどんどん小さく遠くなり、電
しんばしらの碇がいし子がきらつきらつと続つづいて二つばか
り光あって、またとうもろこしの林はやしになつてしまいま

した。こつち側がわの窓まどを見ますと汽車はほんとうに高い崖がけの上を走っていて、その谷の底そこには川がやっぱり幅はばひろく明るく流ながれていたのです。

「ええ、もうこの辺へんから下りです。なんせこんどは一ぺんにあの水面すいめんまでおりて行くんですから容易よういじゃありません。この傾斜けいしゃがあるもんですから汽車は決けつして向むこうからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう」さっきの老人ろうじんらしい声が言いいました。

どんどんどんどん汽車は降おりて行きました。崖がけの

はじに鉄道てつどうがかかるときは川が明るく下にのぞけた
のです。ジヨバンニはだんだんこころもちが明るく
なってきました。汽車が小さな小屋こやの前を通って、
その前にしょんぼりひとりの子供こどもが立ってこつちを
見ているときなどは思わず、ほう、と叫さけびました。

どんどんどんどん汽車は走って行きました。室中へやじゆう
のひとたちは半分はんぶんうしろの方へ倒たおれるようになりな
がら腰掛こしかけにしつかりしがみついでいました。ジヨバ
ンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそ
して天の川は汽車のすぐ横手よこてをいままでよほど激はげし

く流ながれて来たらしく、ときどきちらちら光ひかりってなが
れているのでした。うすあかい河原かわらなでしこの花が
あちこち咲さいていました。汽車はようやく落おち着つい
たようにゆっくり走り走はっていました。

向むこうとこっちの岸きしに星ほしのかたちとつるはしを書
いた旗はたがたっていました。

「あれなんの旗はただろうね」ジヨバンニがやつともの
を言いいました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。
鉄てつの舟ふねがおいてあるねえ」

「ああ」

「橋を架けるとこじゃないんでしょうか」女の子が
言いました。

「ああ、あれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。
けれど兵隊のかたちが見えないねえ」

その時向こう岸ちかくの少し下流の方で、見えな
い天の川の水がぎらっと光って、柱のように高くは
ねあがり、どおとはげしい音がしました。

「発破だよ、発破だよ」カムパネルラはこおどりしま
した。

その柱はしらのようになった水は見えなくなり、大きな
鮭さけや鱒ますがきらつきらつと白く腹はらを光らせて空中にほ
うり出されてまるい輪わを描えがいてまた水に落おちまし
た。ジョバンニはもうはねあがりたくらいきも気持ち
が軽かるくなつて言いいました。

「空こうの工兵大へい隊だ。どうだ、鱒ますなんかこまるでこんな
になつてはねあげられたねえ。僕ぼくこんな愉ゆ快かいな旅たびは
したことない。いいねえ」

「あの鱒ますなら近くで見たらこれくらいあるねえ、た
くさんさかないるんだな、この水の中に」

「小さなお魚もいるんでしょうか」女の子が談はなしにつ
り込まれて言いいました。

「いるんでしょう。大きなのがいるんだから小さい
のもいるんでしょう。けれど遠くだから、いま小さ
いの見えなかったねえ」ジヨバンニはもうすっかり
機嫌きげんが直なおっておもしろそうにわらって女の子に答え
ました。

「あれきつと双子ふたごのお星さまのお宮みやだよ」男の子が
いきなり窓まどの外ほかをさして叫さけびました。

右手みぎの低い丘おかの上に小さな水晶すいししようでもこさえたよ

うな二つのお宮みやがならんで立っていました。

「双子ふたごのお星さまのお宮みやってなんだい」

「あたし前になんべんもお母つかさんから聞いたわ。ちやんと小さな水晶すいしゅうのお宮みやで二つならんでいるからきつとそうだわ」

「はなしてごらん。双子ふたごのお星さまが何をしたつての」

「ぼくも知ってらい。双子ふたごのお星さまが野原あそへ遊びにでて、からすと喧嘩けんかしたんだろう」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸きしにね、おっ

かさんお話しなすったわ、……」

「それから彗星がギーギーフーギーギーフーて言いつて来たねえ」

「いやだわ、たあちゃん、そうじゃないわよ。それはべつの方だわ」

「するとあすここにいま笛を吹ふいているんだらうか」

「いま海へ行つてらあ」

「いけないわよ。もう海からあがっていらっしやったのよ」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう」

川の向こう岸がにわかぎしに赤くなりました。

楊やなぎの木や何かもまっ黒にすかし出され、見えない
天の川の波なみも、ときどきちらちら針はりのように赤く光
りました。まったく向むこう岸ぎしの野原に大きなまっ赤
な火が燃もされ、その黒いけむりは高く桔梗ききょういろのつ
めたそうな天をも焦こがしそうでした。ルビーよりも
赤くすきとおり、リチウムよりもうつくしく酔よった
ようになつて、その火は燃もえているのでした。

「あれはなんの火だろう。あんな赤く光る火は何を

燃やせばできるんだろう」ジヨバンニが言いました。
「蠍の火だな」カムパネルラがまた地図と首っぴきして答えました。

「あら、蠍の火のことならあたし知ってるわ」

「蠍の火ってなんだい」ジヨバンニがききました。

「蠍がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるって、あたし何べんもお父さんから聞いたわ」

「蠍って、虫だろう」

「ええ、蠍は虫よ。だけどいい虫だわ」

「蠍いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつ

けてあるの見た。尾おにこんなかぎがあつてそれで螯さされると死ぬしつて先生が言いつてたよ」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さんこう言いつたのよ。むかしのバルドラの野原に一ひびきの蠍さそりがいて小さな虫やなんか殺ころしてたべて生きていたんですつて。するとある日いたちに見つかつて食べられそうになつたんですつて。さそりは一生けん命めいにげてにげたけど、とうとういたちを押おえられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸いどがあつてその中に落おちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないで、

さそりはおぼれはじめたのよ。そのときさそりはこ
う言^いってお祈^{いの}りしたというの。

ああ、わたしはいままで、いくつのものの命^{いのち}をとつ
たかわからない、そしてその私がこんどいたちにと
られようとしたときはあんなに一生けん命^{めい}にげた。
それでもとうとうこんなになってしまった。ああな
んにもあてにならない。どうしてわたしはわたしの
からだを、だまっていたちにくれてやらなかったろ
う。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どう
か神^{かみ}さま。私の心をごらんください。こんなにむな

しく命いのちをすてず、どうかこの次つぎには、まことのみんなの幸さいわいのために私のからだをおつかいください。つて言いったというの。

そしたらいつか蠍さそりはじぶんのからだだが、まっ赤なうつくしい火になって燃もえて、よるのやみを照てらしているのを見たつて。いまでも燃もえてるつてお父さんおっしやったわ。ほんとうにあの火、それだわ」「そうだ。見たまえ。そこらの三角標さんかくひょうはちようどさそりの形にならんでいるよ」

ジョバンニはまったくその大きな火の向むこうに三

つの三角標さんかくひょうが、ちようどさそりの腕うでのように、こつちさんかくひょうに五つの三角標がさそりの尾おやかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃もえたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれて、みんなはなんとも言いえずにぎやかな、さまざまの楽がくの音ねや草花くさなのおいのようなもの、口笛くちぶえや人々のざわざわ言いう声こゑやらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつて、そこにお祭りまつりでもあるとい

うような気がするのでした。

「ケンタウル露つゆをふらせ」いきなりいままで睡ねむっていたジヨバンニのとなりの男の子が向むここの窓まどを見ながら叫さけんでいました。

ああそこにはクリスマスストリイのようにまっ青な唐檜とうひかもみの木がたって、その中にはたくさんのたくさんの豆電燈まめでんとうがまるで千の蛍ほたるでも集あつまったようについていました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭さいだねえ」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ」カムパネルラ

がすぐ言いました。

(此の間原稿なし)

「ボール投げなら僕決してはずさない」

男の子が大いばりで言いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりるしたくをしてください」青年がみんなに言いました。

「僕、もう少し汽車に乗ってるんだよ」男の子が言いました。

カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立ってしたくをはじめましたけれどもやっぱりジョバンニ

たちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりなけあいけないのです」青年はきちつと口を結むすんで男の子を見おろしながら言いいました。

「厭いやだい。僕ぼくもう少し汽車へ乗のってから行くんだい」

ジョバンニがこらえかねて言いいました。

「僕ぼくたちといっしよに乗のって行こう。僕ぼくたちどこまでだつて行ける切符持きつぷってるんだ」

「だけどあたしたち、もうここで降おりなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから」

女の子がさびしそうに言いいました。

「天上へなんか行かなくたっていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりももっといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が言ったよ」

「だっておっ母さんも行ってらっしやるし、それに神さまがおっしやるんだわ」

「そんな神さまうその神さまだ」

「あなたの神さまうその神さまよ」

「そうじゃないよ」

「あなたの神さまってどんな神さまですか」青年は笑いながら言いました。

「ぼくほんとうはよく知りません。けれどもそんなんでなしに、ほんとうのたった一人の神さまです」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」

「ああ、そんなんでなしに、たったひとりのほんとうのほんとうの神さまです」

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前に、わたくしたちとお会いになることを祈ります」青年はつつましく両手を組みました。

女の子もちようどその通りにしました。みんなほ

んとうに別れわかが惜おしそうで、その顔いろも少し青ざめて見えました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣なき出そうとしました。

「さあもうしたくはいいいんですか。じきサウザンクロスですから」

ああそのときでした。見えない天の川の川のずうっと川下に青だいだいや橙だいだいや、もうあらゆる光でちりばめられた十字架じゆうじかが、まるで一本の木というふうふうに川の中なかから立たつてかがやき、その上には青じろい雲うがまるい環わになって後光こうのようようにかかっているいるのでした。汽車

の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あっちにもこっちにも子供が瓜に飛びついたりするときのようなよろこびの声や、なんとも言いようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になり、あの苹果の肉のような青じろい環の雲も、ゆるやかにゆるやかに繞っているのが見えました。

「ハレルヤ、ハレルヤ」明るくたのしくみんなの声はひびき、みんなはそのそらの遠くから、つめたい

そらの遠くから、すきとおったなんとも言いえずさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんのシグナルや電でん燈とうの灯あかりのなかを汽車はだんだんゆるやかになり、とうとう十字架じゆうじかのちようどま向むかいて行いってすつかりとまりました。

「さあ、おりるんですよ」青年は男の子の手をひき姉あねは互たがいにえりや肩かたをなおしてやってだんだん向むこうの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら」女の子がふりかえって二人に言いいました。

「さよなら」 ジョバンニはまるで泣き出したいのをこらえておこったようにぶっきらぼうに言いました。

女の子はいかにもつらそうに眼を大きくして、も一度こつちをふりかえって、それからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまいにわかにならんとして、さびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んで、あの十字架の前の天の川のなぎさにひざまずい

ていました。そしてその見えない天の川の水をわたって、ひとりのこうごうしい白いきもの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼び子は鳴らされ汽車はうごきだし、と思ううちに銀いろの霧が川下の方から、すうっと流れて来て、もうそっちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち、黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのとき、すうつと霧きりがはれかかりました。どこかへ行く街道かいどうらしく小さな電燈でんとうのいちれつ一列についた通りがありました。それはしばらく線路せんろに沿そって進すすんでいました。そして二人ふたりがそのあかしの前を通って行くときは、その小さな豆いろの火はちようどあいさつでもするよう**に**ぼか**つ**と消きえ、二人ふたりが過あぎて行くときまた点つくのでした。

ふりかえって見ると、さっきの十字架じゆうじかはす**つ**かり小さくなつてしま**い**、ほんとうにもうそのま**ま**胸むねにもつるされそうになり、さっきの女の子や青年たち

がその前の白い渚なぎさにまだひざまずいているのか、それともどこか方角ほうかくもわからないその天上へ行ったのか、ぼんやりして見分けられませんでした。

ジョバンニは、ああ、と深く息いきしました。

「カムパネルラ、また僕ぼくたち二人ふたりきりになったねえ、どこまでもどこまでもいっしょに行こう。僕ぼくはもう、あのさそりのように、ほんとうにみんなの幸さいわいのためならば僕ぼくのからだなんか百ぺん灼やいてもかまわない」

「うん。僕ぼくだってそうだ」カムパネルラの眼めにはき

れいな涙なみだがうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいはいつたいなんだろう」

ジョバンニが言いいました。

「僕ぼくわからない」カムパネルラがぼんやり言いいました。

「僕ぼくたちしつかりやろうねえ」ジョバンニが胸むねいっぱい新しい力が湧わくように、ふうと息いきをしながら言いいました。

「あ、あすこ石炭袋せきたんぶくろだよ。そらの孔あなだよ」カムパネ

ルラが少しそつちを避けるようにしながら天の川のひととこを指さしました。

ジヨバンニはそつちを見て、まるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまつくらな孔が、どおんとあいているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるか、いくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えず、ただ眼がしんしんと痛むのでした。ジヨバンニが言いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。ど

「こまでもどここまでも僕^{ぼく}たちいつしよに進^{すす}んで行く」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集^{あつ}まってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいるのはぼくのお母さんだよ」

カムパネルラはにわか^{まど}に窓の遠くに見えるきれいな野原を指^さして叫^{さけ}びました。

ジョバンニもそつちを見ましたけれども、そこはぼんやり白くけむっているばかり、どうしてもカム

パネルラが言ったように思われませんでした。

なんとも言えずさびしい気がして、ぼんやりそつちを見ていましたら、向こうの河岸に二本の電信ばしらが、ちょうど両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たちいっしょに行こうねえ」ジヨバンニがこう言いながらふりかえって見ましたら、そのいままでカムパネルラのすわっていた席に、もうカムパネルラの形は見えず、ただ黒いびろうどばかりひかっています。

ジョバンニはまるで鉄砲丸てつぽうだまのように立ちあがりま
した。そして誰だれにも聞こえないように窓まどの外へから
だを乗のり出して、力いっぱいはげしく胸むねをうって叫さけ
び、それからもう咽喉のどいっぱい泣なきだしました。

もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思
いました。そのとき、

「おまえはいったい何を泣ないているの。ちよつとこつ
ちをござらん」いままでたびたび聞こえた、あのやさ
しいセロのような声が、ジョバンニのうしろから聞
こえました。

ジヨバンニは、はっと思つて涙をなみだはらつてそつちをふり向きむました、さつきまでカムパネルラのすわっていた席せきに黒い大きな帽子ぼうしをかぶつた青白い顔のやせた大人おとなが、やさしくわらつて大きな一冊さつの本をもっていました。

「おまえのともだちがどこかへ行つたのだらう。あのひとはね、ほんとうにこんや遠くへ行つたのだ。おまえはもうカムパネルラをさがしてもむだだ」
「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐに行こうと言いつたんです」

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいつしよに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあうどんなひとでも、みんな何べんもおまえといっしよに苹果りんごをたべたり汽車に乗のったりしたのだ。だからやっぱりおまえはさつき考えたように、あらゆるひとのいちばんの幸福こつぷくをさがし、みんなといっしよに早くそこに行くがいい、そこではかりおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいつしよに行けるのだ」

「ああぼくはきつとそうします。ぼくはどうしてそ

れをもとめたらいいでしょう」

「ああわたくしもそれをもとめている。おまえはおまえの切符きっぷをしつかりもっておいで。そして一しんに勉強べんきょうしなけあいけない。おまえは化学かがくをならつたらう、水は酸素さんそと水素すいそからできているということを知っている。いまはたれだつてそれを疑うたがやしない。実験じっけんしてみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔むかしはそれを水銀すいぎんと塩しおでできていると言いつたり、水銀と硫黄いおうでできていると言いつたりいろいろ議論ぎろんしたのだ。みんながめいめいじぶんの神かみさまがほんと

うの神さままだというだろう、けれどもお互いほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだろう。それからぼくたちの心がいいとかわるいとか議論するだろう。そして勝負がつかないだろう。けれども、もしおまえがほんとうに勉強して実験でちゃんとほんとうの考えと、うその考えとを分けてしまえば、その実験の方法さえきまれば、もう信仰も化学と同じようになる。けれども、ね、ちよつとこの本をごらん、いいかい、これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年

の地理と歴史が書いてある。よくごらん、紀元前二千二百年のことでないよ、紀元前二千二百年のころにみんなが考えていた地理と歴史というものが書いてある。

だからこの頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。いいかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本当だ。さがすと証拠もぞくぞく出ている。けれどもそれが少しどうかなとこう考えだしてごらん、そら、それは次の頁だよ。

紀元前^{きげんぜん}一千年。だいぶ、地理^{ちり}も歴史^{れきし}も変わ^かってるだろう。このときにはこうなのだ。変^{へん}な顔をしてはいけない。ぼくたちはぼくたちのからだだって考えだって、天の川だって汽車^{くるま}だって歴史^{れきし}だって、たまたまそう感じているのなんだから、そらごらん、ぼくといっしょにすこしこころもちをしずかにしてごらん。いいか」

そのひとは指^{ゆび}を一本あげてしずかにそれをおろしました。するといきなりジョバンニは自分というものが、じぶんの考えというものが、汽車^{くるま}やその学者^{がくしゃ}

や天の川や、みんないっしょにぽかっと光って、し
いんとなくなつて、ぽかっともつてまたなくなつ
て、そしてその一つがぽかっともると、あらゆる
広い世界ひろせかいががらんとひらけ、あらゆる歴史れきしがそなわ
り、すつと消えるきと、もうがらんとした、ただもう
それつきりになつてしまふのを見ました。だんだん
それが早くなつて、まもなくすつかりもとのとおりに
なりました。

「さあいいか。だからおまえの実験じっけんは、このきれぎ
れの考えのはじめから終おわりすべてにわたるようで

なければいけない。それがむずかしいことなのだ。けれども、もちろんそのときだけでもいいのだ。ああごらん、あすここにプレシオスが見える。おまえはあのプレシオスの鎖くさりを解とかなければならない」

そのときまっくらな地平線ちへいせんの向むこうから青じろいのろしが、まるでひるまのようにうちあげられ、汽車の中はすっかり明るくなりました。そしてのろしは高くそらにかかって光りつづけました。

「ああマジエランの星雲せいうんだ。さあもうきつと僕ぼくは僕ぼくのために、僕ぼくのお母さんのために、カムパネルラの

ために、みんなのために、ほんとうのほんとうの
幸福をさがすぞ」

ジヨバンニは唇を噛んで、そのマジエランの星雲
をのぞんで立ちました。そのいちばん幸福なそのひ
とのために！

「さあ、切符をしっかり持っておいで。お前はもう夢
の鉄道の中でなしにほんとうの世界の火やはげしい
波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけ
ない。天の川のなかでたった一つの、ほんとうのそ
の切符を決しておまえはなくしてはいけない」

あのセロのような声がしたと思うとジヨバンニは、あの天の川がもうまるで遠く遠くなつて風が吹き自分はまっすぐに草の丘おかに立っているのを見、また遠くからあのブルカニはかせ博士の足おとのしずかに近づいて来るのをききました。

「ありがとうございます。私はたいへんいい実験じっけんをした。私はこんなしずかな場所ばしょで遠くから私の考えを人に伝えつたる実験じっけんをしたいとさつき考えていた。お前の言いった語はみんな私の手帳てちようにとつてある。さあ帰つておやすみ。お前は夢ゆめの中で決心けっしんしたとおりましたすすまっすぐに進すすみ。

んで行くがいい。そしてこれからなんでもいつでも私のところへ相談そうだんにおいでなさい」

「僕ぼくきつとまっすぐに進すすみます。きつとほんとうの幸福こうふくを求めます」ジヨバンニは力強ちからづよく言いいました。

「ああではさよなら。これはさっきの切符きっぷです」

博士はかせは小さく折おった緑みどりいろの紙をジヨバンニのポケットに入いれました。そしてもうそのかたちは天気輪てんきりんの柱はしらの向むこうに見えなくなっていました。

ジヨバンニはまっすぐに走はって丘おかをおりました。

そしてポケットがたいへん重おもくカチカチ鳴るのに

気がつきました。林の中でとまってそれをしらべて
みましたら、あの緑いろのさつき夢の中で見たあや
しい天の切符の中に大きな二枚の金貨が包んであり
ました。

「博士はかせありがとう、おつかさん。すぐ乳ちちをもって行
きますよ」

ジヨバンニは叫さけんでまた走りはじめました。何か
いろいろのものが一ぺんにジヨバンニの胸むねに集あつまっ
てなんとも言いえずかなしいような新しいような気が
するのです。

琴の星がずうっと西の方へ移ってそしてまた夢の
ように足をのばしていました。

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の
中につかれてねむっていたのでした。胸はなんだか
おかしく熱り、頬にはつめたい涙がながれていまし
た。

ジヨバンニはばねのようにはね起きました。町は
すっかりさっきの通りに下でたくさんあかりの灯を綴って
はいましたが、その光はなんだかさつきよりは熱し

たというふうでした。

そしてたったいま夢^{ゆめ}であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかり、まっ黒な南の地平線^{ちへいせん}の上ではことにけむったようになって、その右には蠍座^{さそりせ}の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置^{いち}はそんなに変わ^かってもいないようでした。

ジヨバンニはいっさんに丘^{おか}を走^まって下りました。まだ夕ごはんをたべないで待^まっているお母さんのことが胸^{むね}いっぱいに思^{おも}いだされたのです。どんどん黒

い松まつの林の中を通って、それからほの白い牧場ぼくじょうの柵さくをまわって、さっきの入口から暗い牛舎ぎゅうしゃの前へまた来ました。そこには誰だれかがいま帰ったらしく、さっきなかつた一つの車が何かの樽たるを二つ載のつけて置おいてありました。

「今晚こんばんは」ジヨバンニは叫さけびました。

「はい」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「なんのご用ですか」

「今日牛乳ぎゅうにゅうがぼくのところへ来なかつたのですが」

「あ、済みませんでした」その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもつて来てジヨバンニに渡しながら、また言いました。

「ほんとうに済みませんでした。今日はひるすぎ、うっかりしてこうしの柵をあけておいたもんですから、大将さつそく親牛のところへ行つて半分ばかりのんでしましましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただいで行きます」

「ええ、どうも済みませんでした」

「いいえ」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のでのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になって、その右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七、八人ぐらいつ集まって橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上に

もいろいろなあかりがいっぱいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近くの人たちへ、「何かあつたんですか」と叫ぶようにききました。

「こどもが水へ落ちたんですよ」一人が言いますと、その人たちは一斉にジヨバンニの方を見ました。ジヨバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジヨバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原

へおりました。

その河原かわらの水ぎわに沿そってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向むこう岸ぎしの暗くらいどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中からすうりをもう烏瓜からすうりのあかりもない川が、わずかに音をたてて灰はいいろにながり流れていたのでした。

河原かわらのいちばん下流かりゆうの方へ洲すのようになって出たところあつに人の集まりがくつきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りまわりました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラと

いっしょだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄って言いました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

「どうして、いつ」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまなかった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」

「みんなさがしてるんだろう」

「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった」

ジョバンニはみんなのいるそっちの方へ行きました。そこに学生たちや町の人たちにかこ囲まれて青じろいどがったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服ふくを着きてまっすぐに立って左手に時計とけいを持ってじつと見つめていたのです。

みんなもじつと河かわを見ていました。誰も一言ひとことも物もの

を言う人もありませんでした。ジヨバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして、黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れていくのが見えるのでした。

下流かりゆうの方の川はばいっばい銀河ぎんがが巨おおきく写うつって、まるで水のないそのままのそらのように見えませんでした。

ジヨバンニは、そのカムパネルラはもうあの銀河ぎんがのはずれにしかいないというような気がしてしかた

なかったのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ」と言いながらカムパネルラが出て来るか、あるいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がしてしかたないらしいのでした。けれどもとにかくカムパネルラのお父さんがきつぱり言いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」

ジョバンニは思わずかけよって博士はかせの前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています、ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのです、と言いおうとしましたが、もうのどがつまってないんとも言いえませんでした。すると博士はかせはジョバンニがあいさつに来たとても思ったものですか、しばらくくしげしげジョバンニを見ていましたが、

「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚こんばんはありがとう」とていねいに言いいました。

ジョバンニは何も言いえずにただおじぎをしまし

た。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか」博士は堅く時計を握ったまま、またききました。

「いいえ」ジヨバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日たいへん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころな

んだが。船が遅れたんだな。ジヨバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね」

そう言いながら博士はまた、川下の銀河のいっばいにうつった方へじつと眼を送りました。

ジヨバンニはもういろいろなことむねで胸がいつぱいで、なんにも言いえずに博士はかせの前をはなれて、早くお母さんに牛乳ぎゆうにゆうを持って行って、お父さんの帰ることもを知らせようと思うと、もういちもくさんに河原かわらを街まちの方へ走りました。

底本…「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1987（昭和62）年3月30日改版50版

入力…幸野素子


校正…土屋隆

2005年8月18日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル…

電子書籍作成 はつかぶつくす



電子書籍作成

はっかぶっくす

<http://hakkabooks.com/>